

海老と大鳥・浜田市三隅町古市場

令和3年3月2日掲載予定

収録・解説・酒井

董美

イラスト・福本 隆男



語り手 西田丈市さん（明治26年生まれ）  
収録・昭和35年3月6日

## あらすじ

昔、あるところに一羽ばかりに三千里、二羽ばたきで六千里も飛ぶ、大きな鳥がおりました。あるときその鳥が、「わしより大けな鳥はおるまい」と思つて、ある朝、早く西の果てを見ようと、羽ばきはじめました。一日経つて夕暮れになりました。今夜はどうでも泊まらんやあならんが、何かええ宿がないやら」と捜していましたが、海の中に大きな二本の柱が落ちておりました。この柱に止まって休んでやろう。」

そう思つた鳥は、その柱の上へ降りました。うな。そうしたところが、「きさま、わしの鼻ひげへ止まつたが、無礼じゃ」と声がしました。大きな鳥は、「これはさつぱりしもうた。わしより大きいものはおらん思うとりましたが、これが鼻ひげちゅやあ、こりや負けたと

言いました。その鼻ひげの主は海老だつた。うな。今度はその海老がまた、

「わしより大けなものはおるまい」と思つて、西の果てを捜して泳ぎだしました。ずんずんずん泳いでおりましたところが、また日が暮れて晩になりしたから、宿がないかと捜しておりましたところが、大きな岩の穴がありました。海老はその岩の穴に入つて、「今夜はここでやすもう」

そう思つて休んでいましたら、だれかが、「こそばいい」と言います。よく聞くと、「わしの鼻の穴へ入つたが、こそばいい」

「何を言うか。わしより大きいものはおらんと思つておるのに」と海老が言いました。ところが、その声の主は、「出んようなら、つき出いぢやる」と言いました。それは赤エイの鼻の中だつたのです。

海老は赤エイとは知らずに、赤エイの鼻の穴の中に入つたのです。

それで赤エイが「クスン」と咳をしました。

そうしたら、海老は向こうの岩にひどくぶつかつてしまつて腰が折れてしまひました。

それ以来、海老というものは腰が曲がつています。

## 解説

実にスケールの大きな話ではある。この話をうかがつた当時は、わたしが昔話収録を始めて間もないころのことであつた。話の中で西田さんは咳のことを「しわぶき」と表現された。これは言うまでもなく咳の古語である。わたしは自然な調子で古語を駆使して語られるこの話に、不思議な気持ちになりながら楽しく耳を傾けたことを思い出す。そしてこの話では他にも上には上があるのであるから、自分が一番上であると思つてはならないという教訓がそれとなく示されているのである。

これは関敬吾博士の『日本昔話大成』では「笑話」の「巧智譚」に「業較べ」の中に「大鳥と蝦」として登録されている話型である。

出雲かんべの里「民話の部屋」のHPで石見方言で語られる音声をお聴きいただき、詳細は記しておいたので、興味のある方はそこをご覧いただきたい。

（元島根大学法文学部教授）

